

古墳時代前期の生産の画期

金属器生産の評価をめぐって

How Characterized the Transformation of Production During
the Early Kofun Period with the Bronze and Iron Artifacts

上野祥史

UENO Yoshifumi

はじめに

① 弥生時代から古墳時代への転換と生産の画期

② 銅鏡の生産

③ 鉄鏃・銅鏃と鉄刀・鉄剣の生産

④ 石製品と玉類の生産

⑤ 各種生産の比較と古墳時代前期生産の特質について

おわりに

【論文要旨】

古墳時代前期を生産が変化する画期として認識する傾向は強い。精巧なつくりと精良な品質をもち、かつ規格性の高い製品が、近畿地方を中心に広域へと流通する現象は、「集約」「先進性」「拡大／大規模」「管理」と形容する生産への変化として理解される。こうした生産の一大変革は、古墳時代社会の形成がより大きなヒアタスを伴うこと関連付けて、肯定的に受け入れられる。しかし、生産地や生産体制の判明している石製品や玉類では、必ずしも「集約」「先進性」「拡大／大規模」「管理」と形容できる様相は見いだせない。

本論では、銅鏡、銅鏃、鉄鏃、鉄製刀剣など、古墳時代前期において生産した器物を対象に、既存の議論に基づき生産の実態を整理した。器物を横断して、王権の生産への関与を相互比較することによって、古墳時代前期の生産の特徴を検討した。

古墳時代前期には、新旧の技術を複合して新たな生産が展開するが、生産体制は前代と大きく異なるのではない。生産の拡大は、生産の集中や一元管理、あるいは専有管理といった質的な変化を伴うものではない。技術の革新や生産の革新よりも、技術や生産の複合・融合という性格が強い。古墳時代前期の画期は、専門化や高度化など生産の次元を変える垂直方向の変化ではなく、異なる技術系譜を複合させた水平方向の変化として評価できることを示した。生産を専有管理しない古墳時代前期には、弥生時代後期・終末期とのつながりがみえ、古墳時代中期にこそ生産の画期が見いだせるのである。

【キーワード】 青銅器、鉄器、石製品、玉類、流通の統制、生産の管理